

第2回国土開発映画コンクール入賞作品について

1. ま え が き

土木学会では、2年前、学会創立50周年記念事業の一つとして国土開発映画コンクールを行ないましたが、そのとき好評を博し、かつ土木図書館運営委員会においても、図書館活動の一環としてフィルムライブラリーを設けて、土木技術の視聴覚教育にのり出すことになった。そこで今後、隔年に映画コンクールを開催し、優秀映画を広く開発紹介することとなり、本誌の会告で募集を行なった結果、9月末日の締切りまでに46編の応募を見た。

さきの50周年記念事業のときは32編であったのに比し、大幅な増加である。

なお今回は建設省ならびに国有鉄道の後援ということで、わが国の土木関係の代表的コンクールといえよう。

2. 審 査

応募作品を部門別に分類すると、道路8、鉄道6、発電6、利水治水9、港湾5、トンネル2、その他10となり、また応募先（企画者）で分類すると官公庁19、建設業17、鉄鋼3、その他の民間7となっている。

審査は予備審査と本審査とにわかれ、予備審査で優秀作品6編とほかに佳作2編を選定し、これを本審査にかけて1等1編、2等2編、3等3編を決定した。

予備審査のための委員会は、官公庁、学校、民間などの新進気鋭の方々14人で編成され、10月6、7日の両日土木学会の講堂で朝早くから夜間にかけて行なわれ、重労働であったが終始熱心に審査が行なわれた。時間の制限上募集規格に合わないものは割愛したり、上映時間が1時間にもおよぶものはやむを得ず一部をカットせざるを得なかった。

審査に当っては、つぎのことが考慮された。

(1) 企画、表現、構成

(2) 撮影、説明、色彩、音楽、作画、編集

(3) 特定企業の宣伝色の濃いもの、公共性の乏しいもの、視聴覚教材として不適当なものはとらない

本審査は学会の会長はじめ関係役員など土木から6

人、外部の文部省、映画評論家、新聞社などその道の権威者5人からなる委員会で、10月12日行なわれた。

予備審査通過の6編について、上映後討議がなされた後、投票によって1等を決定し、さらに十分討議後、2等が投票によって決定された。

3. 審査委員の評

批評の主なものを記すと、

(1) かつての「佐久間ダム」や「黒部峡谷」のような大作名作に比して、最近の作品は小粒といった感じを受けた。

(2) 以前は文部省やその他のコンクールで建設映画が必ず上位を占めたものだが、ここ二、三年は減少しつつある。

(3) 作品の質は平均化され、色彩などもよくなったが、材料を羅列した平面的な作品が多く、映画の中にもり上りがない。一つの型ができてそれを破れないといった感がある。しかし視聴覚の教材としては立派な作品が沢山あったのは大きな収穫であったといえよう。

良い映画を作るには、良心的な製作グループを選ぶべきである。また、予算も十分にとり、スポンサーだからといって余り内容に干渉するのは避けるべきであろうとの意見があった。

4. 入賞作品と審査委員

(1) 入賞作品

入賞区分	タイトル	記 事
最優秀賞	よみがえる川	企画 群馬県 製作 三井プロダクション
優秀賞	砂 防	企画 平和国土計画会議 製作 旭映画社
同 上	高 潮 に 挑 む	企画 建設省関東地建 製作 松崎プロダクション
準優秀賞	海 の 新 土	企画 建設省中部地建 製作 CBC テレビ映画社
同 上	えい智の結晶	企画 神奈川県 製作 神奈川ニュース映画社

準優秀賞	第三の道路	企画 日本道路公団 製作 電通映画社
佳作	東京の地下に挑む	企画 大成建設KK 製作 日本映画新社
同上	摩耶大橋	企画 神戸市 製作 日本シネセル

(2) 審査委員

予備審査委員(順序不同)

香取 克昌(建設省)	浅川 美利(図書館運営委員)
五十嵐有一(水資源公団)	岩田 嘉夫(鹿島建設)
三木 信弥(首都高速公団)	金沢 節(住友建設)
佐藤 光春(電源開発)	大隈 正登(運輸省)
武川恵之助(清水建設)	中守 正男(道路公団)
永田 正男(小石川工高校)	三宅 政光(田無工高校)
福田 実(国有鉄道)	清水 力(帝都高速営団)

本審査委員(順序不同)

伊藤 富雄(関西支部幹事長)	岡部 三郎(前土木学会々長)
草壁久四郎(毎日新聞学芸部)	篠原 武司(土木学会々長)
鈴木 勉	津田 亮一
(文部省視聴覚専門員)	(文部省教育映画審査会長)
登川 直樹(映画評論家)	畑谷 正実(土木学会副会長)
宮永 次雄(映画教育協会次長)	八十島義之助(東大教授)
米元 卓介(土木図書館委員長)	

5. 内容紹介

(1) よみがえる川

酸性が強烈なため死の川として恐れられていた吾妻川を、石灰による中和によって、よみがえらせ、魚がすみ、農作物は増産し、それだけでなく従来は不可能であった発電事業がつつぎとぎと開発されてゆく様子を記録した映画である。

白根山の湯釜から湧沸して硫酸や塩酸を多量に含んだ湯川(草津温泉を流れる)の水は PH 1.8 で、コンクリートも、鉄も数日で腐食してしまい、魚は見ている間に死んでしまう。

東大の八木教授、乙竹助教授の研究室で石灰石を 40 ミクロン程度に砕いて川に投入する方法が確立され、このための恒久施設が設置されて、白い石灰乳が大自然の川の中に投入される。数ヵ月後には川の中に虫や魚が楽しそうに泳遊している。巨費を投入した大工事ではないが、化学と提携することによって可能となった世界でも珍らしい異色の河川総合開発である。

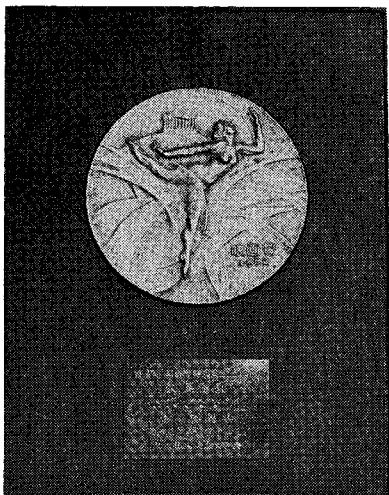
<企画者の言葉> 酸害の問題は化学的にも複雑であり、中和の問題点を平易に映画で表現するのに苦心した。また事業の竣工時点で、撮影に着手したため、酸害状況の復元に撮影スタッフが山間僻地を踏査するなどの苦勞があった。もう少し早く実施していれば、事業の過程が十分に捉えられたらうと反省している。事業の成果が本映画を通じて正しく理解されれば幸いである。

(2) 砂 防

治山治水に砂防がいかに重要であるかを、実地について説明した映画である。山腹砂防から溪流砂防におよび、山地の崩壊した土砂が階段状に築いた砂防えん堤で防止される状態が明らかに写し出されている。

昭和 13 年の台風による六甲山系の崩壊を、見事に砂防えん堤で治めた状態、さらにダムによる大貯水池が二度の洪水で埋没した状態など真にせまるものがある。そして砂防は予防医学であり、災害復旧は臨床医学であるが、臨床医学にのみ政治も予算も傾いている不合理を力説している。

<企画者の言葉> わが国の宿命ともいえる洪水による被害は毎年二千数百億円にのぼり、貴重な人命財産を失っているが、予防砂防より災害復旧に重点がおかれている現状に問題が



■ 映画賞賞牌について

映画賞賞牌の原型は、土木学会賞と同じく故日名子実蔵氏(ペンネーム実三・文展無鑑査)の作品である。氏は明治 25 年、大分県白杵町に生まれ、県立白杵中、慶応義塾理財科をへて大正 7 年東京美術学校彫塑科卒業、留学のうち構造社、第三部会などを結成した芸術家で昭和 20 年 4 月 53 才で死去したが、代表作として八紘一字の塔(紀元 2600 年記念で宮崎市にある)、大友宗麟像(大分市)、傷夷軍人徽章などがある。

カット写真は、本年度最優秀賞「よみがえる川」に対し授与された賞牌で、金色のものである。ちなみに優秀賞に対しては銀色、準優秀賞に対しては銅色、佳作に対しては小型の銅色の賞牌が授与された

あるのではなからうか。題材が大自然の猛威の正確な記録なので全国的に踏査して、山地崩壊の決定的瞬間を再現したスタッフの努力もまた自然との戦いであった。

(3) 高潮に挑む

荒川の放水路は東京を荒川の洪水から守るため昭和6年に竣工したが、江東地区は地盤が沈下し続けて、50年間に3.5mにもおよんで、一度高潮が襲来すると大惨害をもたらすことは明らかである。この映画はこれを防ぐための荒川高潮対策工事の記録である。

鹿島水理実験所の試験の結果にもとづいて頑丈な高潮堤防が築かれ、波浪防止のため中空三角ブロックや堤防の表面に特殊な消波のための工夫が施され、伊勢湾台風程度の高潮が来ても大丈夫という。

<企画者の言葉> 撮影の企画が工事の最終年度に立てられたため、工事記録の収集が少なく目的は果たしていない。広報面からも旧堤防を撮影したものがなく、新堤防との対照を描けなかったのは残念である。台風時の撮影のための待機連絡と、都内のスモッグのため航空撮影には非常に頭を悩ました。

(4) 海の新土

由比の海岸は山が太平洋にせまっておき、けわしい海岸には国鉄東海道線と国道1号線が並列して走っている。昭和36年3月由比町に地すべりが発生して交通は途絶した。この地すべりの土を海岸に捨てて新しく帯状に5.5kmを埋立てて、ここに東名高速道路と国道を新設する工事の記録である。工事は海岸保全と地すべり防止の工事と併行して行なわれた。高潮の押しよせる海岸で、消波のため16tのテトラポッドが大量に使われ、全く頑丈な護岸が印象的である。37年着工以来41年春完成まで、4年の歳月と67億円の工費を要している。

<企画者の言葉> 国土の保全と開発をかねた珍しい事業ケースであり、技術的にも漸新な海岸堤防のダイナミックな工事記録を、駿河湾の風物と歴史の姿をバックに精一杯うたい上げてみたかった。台風時の撮影、工事施工のテンポの表現、施工工程の平易な表わし方などに苦労したが、関係者として今

後の技術水準の向上に努力したい。

(5) えい智の結晶

城山ダムによる相模川の総合開発の記録映画で、その題名が示すように、横浜市、川崎市、横須賀市の上水道および工業用水の確保のほかに、ダムの水を本沢貯水池に揚水して25万kWの発電をし、さらに洪水調節にも役立たせようというものである。昭和35年以来40年11月完成まで5年の歳月と195億円の工費を要した。

この映画にはいろいろの工事が出てくる。すなわち、重力式の城山ダム、ロックフィル式の本沢ダム、地下発電所、発電機のすえつけ、揚水発電、下流での取水工事等であり教育映画としては好適と思われる。

<企画者の言葉> ダム、地下発電所などの建設過程を忠実に再現することもさることながら、水の重要性和相模川の高度利用の必要性を強調したかった。何分にも工事規模も大きく、7年の長期にわたったため、ぼう大な取材フィルム量となり、場面の整理と編集が不十分で散漫となったため、全体の流れに混乱を与えたことを反省している。

(6) 第三の道路

京浜間の自動車交通は早くからまひ状態となり、第三京浜の開通が待たれたが、昭和37年着工以来4年の歳月を要して40年12月開通した。

関東ロームの処理方策や、軟弱地盤との対決など、技術的な苦心が写し出されている。延長16.6km、幅員31.1m・6車線の道路は、曲線が美しく映し出され、特にインターチェンジでの曲線は美しい。

<企画者の言葉> ふくそうする京浜間の交通問題、関東ローム層へ挑む工事の特性、建設工事に取り入れた各種の新設備など、わが国初の6車線ハイウェイの建設記録を本道路の果たす社会への寄与を背景に描いてみたかったが十分に表現できなかった。当初一本でまとめる計画だったが第1部、第2部の二本に分けたので編集には特に苦労した。

(土木学会 羽田 巖・記)

土木図書館フィルム・ライブラリー所蔵フィルムリスト

題 目	時 間	版	題 目	時 間	版
銀座の地下を掘る	35分	S	名神高速道路	67分	W
羽田海底トンネル	32	S	地熱に挑む	23	S
横山ダム建設記録	40	W	海岸線を拓く	32	S
外洋に挑む	51	W	新しい耐震構造 SUダンパ方式	22	S
海を渡る砂	52	S	新しい耐震構造 オイルダンパ方式	10	S
渋谷ディビダーク橋	22	S	由比の地すべり	20	S
川の上を走る高速道路	25	S			
水—この資源	20	S			
東海道新幹線総集編	45	W			

* 管理費として多少の実費を頂戴いたします。詳細は学会図書館にお問合わせ下さい。